
スリーメダル

下崎遊介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スリーメダル

【Nコード】

N4348Y

【作者名】

下崎遊介

【あらすじ】

メダルを全て失った鈴木正臣のところに

『メダル所持者総会』に出席するようと言う手紙が届く。

総会で知る事実。

そして、firstゲーム「鬼ごっこ」が始まる。

1章鬼つつこ編 上

「はぁ．．．．．はぁ．．．．．はぁ．．．．．はぁ．．．．．」

「あんた．．．大丈夫？」

あの手紙が来てから五日。

俺は今．．．．．寝込んでいた。

医者には『過度のストレスによるもの』だと言われてしまった。

あのメダルを失ったその日．．．．．俺の日常は少し変わった。

財布を不良に絡まれて取られ

父親が急に借金を抱えてしまい、出稼ぎに出ていつてしまった。

クラスにはなぜかわからないが

俺が教師を脅してテストで点を取ってるだとか

薬物投与を働いているだのんでもない俺の噂が流れた。

そのせいで中のいい四人ぐらいしか

俺に声をかけてくれる人はいなくなってしまった。

そしてだ．．．．．。

何よりもショックだったのが、中間テストの結果だった。

俺はこう見えて成績はいいと自負している。

加藤美紀と常にTOP2を競い合っていたのだ．．．。

それなのに――。

俺はクラスの男子の一人に負けた．．．．．。しかも圧倒的成績で。

秀才という名誉さえも失ったのだ。

この四日間で俺は自分なりに築いてきた

【金】【地位】【名誉】を文字通り失ったのだ。

そして極めつけがこの手紙だった――。

『7日．．．．．メダル所持者総会を行います。未所持ですが、

本当に居心地が悪かった。

変な噂が立って解決されていないまま学校を休んだので
クラス中からは『あの噂・・・本当だったんだ・・・』

『だから、事が収まるまで休もうとしたのか？』

とデタラメな事を言ってるのが聞こえた。

唯一仲良く接してくれた中村、石田、神山が居てくれなかったら
今頃俺は翌日ニュースで『こんなことするような子じゃなかった・

・』と

親を泣かしてしまうほどの暴挙に出ていたかもしれない。

そう思うとこの三人には感謝しかなかった。

それと――あともう一人。

「ねえ？本当に大丈夫？？」

单身俯いている俺に話しかけてくれたのは加藤美紀だった。

彼女の友達に『ちよつと美紀やめようよ・・・』とかこそそ言っ
てるのが聞こえたが。

彼女はそんな言葉を一切無視して俺を心配してくれていたのだ。

「お前は・・・疑わないんだな・・・」

「ん？」

少し天然そうな声で頭を捻る加藤美紀。

「その・・・俺の噂。」

俺がそういうと少し笑顔ではにかんでこういった。

「あーあれね。」

頭のいい鈴木君がそんなことするわけないじゃん。みんなバカだ
よねー」

笑顔でそういつてくれた加藤美紀。

――ああ、これで彼女にも何人が敵が出来るかもしれないのに。

「そ、それでも俺に話しかけたら・・・」

俺が続きを言おうとすると口封じをするかのように俺の口の前に立
てた人差し指を置いた。

「だって・・・。私も同じ立場になったら嫌だもん」

今声かけておけば私になった時鈴木君が話しかけてくれるでしょ？」

まるで俺が話しかけるのが当たり前のように彼女は笑顔で言った。既に俺と加藤の周りには近づく人は一人もいなかった。

みんなは俺を軽蔑している目をしていた。

中村達三人だけは俺をニヤニヤしながら見ていた。

「あ、ありがとう……」

俺はただ一言、彼女に礼を言った。

[illegible]

「いやあゝよかつたじゃんかよおゝ正臣ゝ」

石田が少しニヤニヤしながら肩組んで俺に言うてくる。

「こういうのなんて言うんだっけ……不幸中の幸い？」

少し考えながら言う中村。

「んなこたあどうでもいいじゃねえか！ な！ 正臣！！」

石田は心底喜んでくれていた。まるで自分のことのように。

「それにしても意外だったね……。」

あんな状況で僕たち以外に……しかも女子が話しかけてくれるなんて」

神山も僕を見て安堵の表情を浮かべながらそう言った。
なんだかんだでこいつら全員いい奴だな。

「お前らも……なのか？」

┐
┐
┐
?
?
┐
┐
┐

俺の呟きに全員が俺の顔を見て疑問を浮かべる表情をしていた。

「お前らも、加藤と同じように俺がそんなことしないって思っているのか？」

俺の質問に三人はそれぞれの顔を見合わせて少し考えていた。

「いやあ、俺たちはあつこまで綺麗事を考えてないよ。」

鈴木が本当にやったのかも……とも思ってる」

「――つ！？」

石田から発せられた意外だったその言葉に驚く俺だったが、その後

「でも、あの噂が本当だとしても、俺達の友達なんだからそんなもんは関係ない。」

「いっそ俺たちもその噂担いで4当分にしようぜ……。薬物俺たちもやってるぜーとかさ♪」

そう続いた中村の言葉に俺は思わず涙が溢れてきそうだった。

テレビとかで「否定のあとの言葉って言うのは効果抜群！」みたい
な事を言ってたけど

それは本当なんだな……と深く思った。

「お前ら……そんな言葉巧みならず女落とせるって……」

俺はそんな冗談を言いながら込み上げてくる涙を必死に耐えた。

[illegible]

（そういえばご出席って言うてたけどどこに出席したらいいんだ？）

俺はふとそう思いながら一人教室に残っていた。

それにしても今日はある意味いい日だったかも知れない。

そんないい思い出を思い出していた。

まるで走馬灯のように――。

『おまたせいたしました。鈴木正臣様』

「――っ!？」

突然校内放送でそんな言葉響きわたった。

酷く低い声。聞いたことのない声。不気味な声。不審な声。怪物のような声。終わりのような声。

そんな何で例えたらいいかわからないとにかく恐怖心を煽る声がしたと思っただ瞬間だった。

一瞬視界が真っ白になってしまった――。

「・・・・・・ここは？」

目の前に見えたのは狭い視界で見える黒い部屋。

自分はどうかやら仮面をつけているらしい。

辺りを見ると俺と同じく制服姿で仮面をかぶっている生徒が2、3人かいた。

けれどその奥もあるようで、部屋全体が暗くてまったく見えない。だからきつと人の数ももつといるんだろっな・・・・。

『それでは皆さん。仮面をお外しく下さい。ご対面です』

その声に従って俺は仮面を外す。

するとそこには驚愕の光景が目当たりされた。

「な、中村!？」

「鈴木!？」

俺たちはお互いがお互いに驚いた。

「あ、あの・・・・鈴木君？」

その声のするほうに振り向くといいたのは・・・・。

「か、加藤・・・・。」

「鈴木君も・・・メダルの関係者だったんだ」

「お、俺も驚いた。それに――」

俺はそのまま視線を加藤から中村に変えていった。

「お前・・・知ってたんだな。メダルの事。」

「ああ、知っていた。」

「まさかとは思うけど・・・」

俺が疑惑の目で中村を睨んだ。

『ご来場の皆様。まずは一週間。ご苦労様です。』

どこからか聞こえる放送に俺は話を中断して耳を貸した。

『それでは。この一週間で既に変化のあったものを紹介しましょう。

三枚メダルを失った・・・鈴木正臣様。

一枚のメダルを失った中村裕二様

そして・・・四枚のメダルを獲得した。岡崎冬弥様』

その声を聞いた瞬間その場にいた全員が一人の男を睨んだ。

岡崎冬弥・・・俺も知ってる名前だった。

なぜなら――奴が俺が今回のテストで負けた男子なのだから――

。

目付きが悪く、悪巧みしてそんな顔立ちで頭がよくても信用度は低かった男。

世間一般で言えば彼みたいなのを『不良』と呼ぶのだろう。
でも俺の怒りは岡崎には向いてなかった。

（お、俺・・・さつき・・・中村を疑った！！）

あれだけ俺に良くしてくれた中村を一瞬。疑ったんだ！！

それに対する自分への怒りが頂点に上りそうだった。

「おい、中村。」

「なんだよ。鈴木」

「どうして俺にメダルの事を話してくれなかった・・・」

「・・・」

中村は俺に対して何も言えずに黙りこむ。

『それについてはこちらで説明いたしましょう。』

すると突然放送がそう俺たちに話しかけてきた。

『我々はそれぞれに別の手紙を送っているのです。』

一人はただ持っておけと。一人にはただ誰にも話すなど。

一人にはほかのメダル所持者からメダルを奪えと。あるものには人にメダルを渡せと。』

『まあ、大概はただ持っておけ。と言う指示でしたが』

『では、まず最初の関門をクリアした方々にはボーナスとしてメダルを一枚進呈します』

すると、数人の黒子が現れてみんなにメダルを渡していく。

受け取れなかったのは、俺と加藤美紀・・・ほか数名だけだった。

中村は奪われはしたけど、誰にも話していないと言う理由で一枚を獲得していた。

「加藤は・・・どんな手紙だったの？」

「あ、うん。私も岡崎君と一緒に・・・」

奪えだつたんだ。だけど持つてる人がわかんなくて」

「そうか・・・」

俺は正直盗られるなら加藤に取られたかったと心底思った。

「僕はこれで三枚だけど・・・」

「そ、そうだね。俺だけが0枚・・・」

「だ、大丈夫だよ！！きつとすぐ集まるって！！」

中村と加藤は俺を励まそうとそういつてくれた。

当の犯人である岡崎はくすくすと笑いながらこちらを見ていた。くっそ・・・。憎たらしいやつだな！！

そして、そんな会話をしていると・・・放送はこういった。

『では、これからあるゲームをしてもらいます。それは・・・鬼ごっこです』

その言葉は——俺達所持者を地獄へ叩き落とすための囁きに聞こえた。

『ではルールを説明いたします』

放送で流れる声に俺たち全員生唾を飲んだ。

『メダルはいわゆるあなた型のストックになります。』

今から学校に放流される鬼は3体。捕まるとメダルは没収されます。』

「それでメダルが0枚になった終わりってことか？」

誰か知らないけどそんな問いかけの声だけがした。

やっぱり周りが暗くて見えないが、俺ら4人のほかにも人は沢山いるみたいだ。

『少し違います。鬼に捕まり、没収するメダルが無くなれば終わりです。』

つまりメダルが0枚になってしまった後、捕まればゲームオーバーです』

「ってことは……」

中村は驚愕めいた目で俺を見てきた。

「そうだね。今の鈴木君のメダル枚数は……」

加藤も俺を見ながら言った。

「俺は一度捕まれば……終わり。」

俺は今自分が置かれている状況に恐怖した。

テレビで見たことある。

芸能人がお金を掛けて鬼ごっこをするやつ。

黒服きたハンターと呼ばれる人々から芸能人が逃げていくやつ

きつとあれと同じことを学校でやるんだろ。ストック有りで。

この場合捕まってゲームオーバーになったらどうなるんだ？

あの番組だと単にセツトのような牢屋に捕まってへらへら笑いながら

まだ生き残っている参加者を見守りながらトークしてるだけけど・
・・・・・。

このゲームだと・・・何があるんだ？そんな生易しい状況におかれ
るわけがない！！！！

「お、おい鈴木・・・・・汗拭け」

混乱している俺に中村がハンカチを差し出してきた。

その時に気付いた。自分が今汗まみれになっているって事に。

「・・・ふっ、無様だな。」

むかつく声。振り返るとそこには岡崎冬弥が俺を見下すように微笑
しながら見ていた。

「まあ俺が偶然お前の後ろで話を聞いていなかったらこんな状況に
はならなかったんだろうけどな。」

「・・・・・岡崎！！」

「おいおい、ここで何かやったら色々と問題なんじゃねえの？」

俺は隠しきれない怒りを抱きながらもそこはぐっところえた。

確か岡崎の言う通り、ここで何か問題を起こしてこの放送主が何か
してきたら厄介だ。

「雑談はもうよろしいでしょうか？」

『では話を続けます。通常鬼ごっこと言うのは追いかけて逃げ
るものですが

この鬼ごっこはやや趣旨が違います。これは鬼も追いかけられる
のです。』

「「「「「——ッ!?」「」」」」」

放送主の声に俺たちは愕然とした。

こんな鬼ごっこ聞いたことないし、趣旨がまだよく理解できないか
らだ。

『詳しく説明しましょう。鬼はあなた方を追いかけて、メダルを奪っ
ていきます。』

そのメダルはこのゲームが終わるまでその鬼が管理します。そして
その鬼を捕まえるとなんと鬼が溜め込んでいたメダルを総取りで

きるのです』

「…………おいおい。」

俺は思わず声が出た。

これって…………超チャンスじゃね!?

メダルいっぱい取った鬼捕まえたらかの0枚から挽回できるんじゃない?

「…………鈴木!」

「鈴木君!!」

中村が俺の肩を叩いて嬉しそうにしていた。

加藤も希望に溢れた顔をしている。

『ちなみに。

参加者同士でメダルを奪うことも可能です。では15秒後、ゲームを開始します』

そういつて放送がポツンと止まった。

「よし! いつちよやってやるか!!」

「そうだな!」

「うん!!」

俺たち三人はもう徒党を組んでいるかのようにお互いの顔を見て結束を固めた。

そして——15秒が経つ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「…………あれ?」

いたのは移動される前の教室。

そのど真ん中の席に俺は座っていた。
ほかのみんなの姿はない。

「・・・始まった・・・のか？」

俺はやや不安になっていた。

そもそもあれは本当なのか？って言う疑問さえ抱いていた。

もしかしたら最近俺は厨2病を患っていて、

あれはクラスメイトが出てくるだけのただの夢なんじゃないか？

それだったらすげえ嬉しい。もしかしたらあのメダルの存在事態が

夢なのかも！！

俺はそんな期待を抱き、目を輝かせる。

けれど———そんな期待は、脆く崩れさっていく。

「た、助けてくれ！！！！！」

そんな悲鳴が聞こえた。外だ。

俺は窓に向かって歩いて窓から下を見た。

そこには恐ろしい姿をした化け物に追われている一人の男子生徒の姿だった。

「や、やめろ！！まだ始まったばかりかだろ！？なんでここにいらんだよ！！！！！」

その男は怯えた形相で文句を垂れていた。

けれど相手は言葉を理解しているのかわからない化け物。

真っ黒で、きちんと関節があるのか疑いたくなるほど、

関節の形がおかしい大きくて、禍々しい化け物。

四肢は存在するのだが、不規則な四足歩行なのに、物凄いスピードで追いかけている。

正直見ているだけで全身から冷や汗と鳥肌が現れ恐怖心を煽られる。そして・・・。

「や、やめ———」

その男は化け物にのしかかれた。

もぞもぞと動く化け物。本当に気持ち悪い。

少しして化け物はその男から離れていく。

男は顔を歪めて、正気の沙汰とは言えないほど身体をビクンビクンと震わせていた。

「おいおい………なんだよこれ。マンガの世界じゃねえんだからさあ……」

俺はビクビクしながら声を震わせた。

そんな時だった——ボタン！と扉が開かれる音がしたの
は。

俺は肩を震わせていた。

振り返れない。この教室にさっきの化け物が来たんじゃないかって怖くなって……。

自分でもわかるくらいビクビクと身体が震えているのがわかる。

ここは教室だぞ？あんなでかい化け物から逃げれるわけがない！

飛び降りるか？いや、ここは四階だ。それにさっきのやつが下にいる。終わりだっ！！

「……大丈夫だよ。」

そんな俺にすう……つと優しい声と同時に柔らかい感触を感じた。俺の身体の震えは自然に消えていって、その聞き覚えのある声に安堵する。

振り返ると、俺に抱きついてしている加藤美紀の姿があった。

「大丈夫。大丈夫だから……」

震えている俺を安心させようとしてくれたのか何度もそういつている加藤。

もしかしたら自分への暗示なのかもしれない。

まるで泣いている赤子をあやすかのように、加藤は俺の頭を撫でてきた。

「も、もう大丈夫だから……」

俺は恥ずかしくなつて抱きついてしている加藤を引き離れた。

「そう？ならよかった。もう……すっごい震えてるんだもん」

笑顔で俺の顔を見てくる加藤。

それだけで不安が少しだけ……払われた気がした。

「じゃあ中村君探そつか」

「そうだな。三人一緒に行動したほうがいいし」

「いざとなったら分散して撒けるし、鬼を捕まえるってなったら一人じゃ無理だろうからね」

俺と加藤はそう話しながら廊下を歩いた。

本当に誰もいなかった。

そんな時俺はふと見えた掃除道具が入っているロッカーを見つめる。

「ん？何してるの？」

俺がロッカーを開けたのに気付いて加藤は顔を傾けながら俺に話しかけてくる。

「ん？加藤は見えてないのか。あの化け物。鬼三人って言ってたけどありや鬼って言うより

エクソシストとかその辺りの化け物だよ。んで思ったんだけど、

捕まえていいって言ってたけど攻撃するなどは言ってないだろ？」

俺はややどや顔で箒をバツキリ折った鋭利物を持ちながら加藤に言った。

「それで……戦うの？」

「いざつてなったらな。マンガみたいじゃん。加藤もいるか？」

「そういう時は『俺が守るから』とか言うんじゃないの？女の子に武器なんか持たせず」

やや頬を膨らましていう加藤。

「いや、あの化け物見たあとだとそんなかつこいい言葉言う勇氣ないよ。」

俺はあの光景を思い出し、やや足を震えさせながら言う。

「あつそ。まあ私は持たないけどね、守ってもらいたいし、逃げる時に持ってたなら邪魔だもん」

そっぴいながらやや不機嫌な様子で俺よりも先に歩いていく加藤。

「待てって！」

「待たないよあー」

彼女の足早な歩きに俺はやや走りぎみになって追いかけた。

[illegible]

中庭。

「はあ……はあ……なんだよあの化け物……」

メダルの枚数は3枚に減っていた。

この男はさつき鈴木が見た鬼に襲われてメダルを奪われた生徒だ。

（くっそ．．．腰が抜けて動けねえ．．．また鬼きたらどうしょ．．．）

そんな心配をしながらも動けなくなっている身体を必死に起こそうとする。

「ふっふっふ。いいカモがいるじゃねえか。」

するとそこに一人の男が現れる。

目付きの悪い、背のあまり高くない男の姿。

「あ、3枚あるじゃん♪ラッキー」

彼は、ポケットから微かに見え隠れしているメダルを見つけ、喜々とした顔になる。

「おい！お前何！！」

「……うざってえな。ちよつと黙つてろつ!!」

そう言つて身体が動けない男の顔を足蹴にして氣絶させる。

その後、ポケットをごそごそと漁り、メダルを取り出す。

「三枚……こりゃいい稼ぎだな……」

そして男。岡崎冬弥はその三枚を自分のポケットに入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4348y/>

スリーメダル

2011年11月17日13時25分発行